

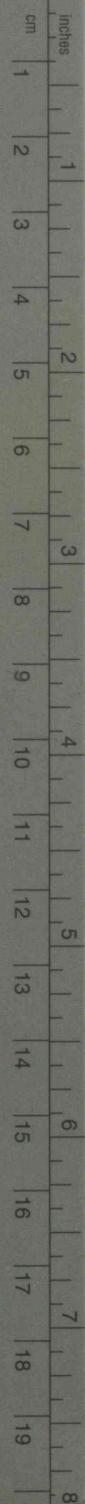
50576

教科書文庫

5
810
45-1948
01304
49845

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

文部省

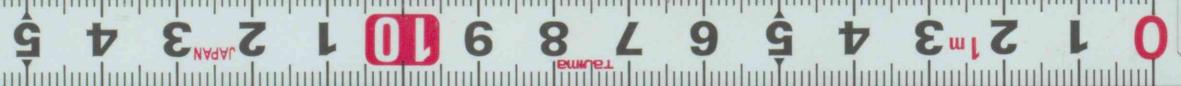
中等國語

三

文部省著作教科書

文部省立高等師範学校附属中學校

(1)



中央図書館

中等國語 三

文部省

(1)

広島大学図書

0130449845



目 錄

一 天の香具山	一
二 新聞の話	二
三 キューリー夫人	八
四 花より雨に	十六
五 山のあなた	二十一
六 小人國	二十四
七 身振り語と言語	三十三
八 制作の方法	四十七
九 長 歌	五十三
十 羽 衣	五十五
附錄 國語學習の手引	六十一
春のはじめの歌	
ほのくと春こそ空に來にけらし天の香具山かすみたなびく 晩霞といふことを詠める	
なごの海のかすみのまよりながむれば入り日をあらふおきつしら波 詩を作らせて歌に合はせ侍りしに、水郷春望 といふことを	
夕月夜しほ満ち來らし難波江のあしのわか葉をこゆるしら波 夏月を詠める	
庭のおもはまだかわかぬに夕だちの空さりげなくすめる月かな 入道前関白右大臣に侍りける時、百首歌詠ま せ侍りける時、ほとゝぎすの歌	
むかし思ふ草のいほりのよるの雨に涙な添へそ山ほとゝぎす 題知らず	
心なき身にもあはれは知られけりしづたつ沢の秋の夕ぐれ	
一 天の香具山	

新古今和歌集

後鳥羽天皇御製

藤原 実定

源 賴政
藤原 秀能

藤原 俊成

西行法師

きり／＼す夜さむに秋のなるまゝによわるか声の遠ざかりゆく

和歌所歌合に、湖辺月といふことを

にほのうみや月のひかりのうつろへば波のはなにも秋は見えけり

百首歌奉りし時

吉野川岸のやまとき咲きにけり峰のさくらは散りはてぬらむ

旅の歌とて詠める

旅人のそで吹きかへす秋風に夕日さびしき山のかけはし

百首歌奉りし時

こまとめてそでうちはらふかけもなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ

藤原定家

人間には、自分の住んでいる所の周囲に起る事件を早く知りたがり、またそれを知った場合は、すぐ他人にこれを知らせたがる本能があります。人類が太古野蛮な時代に、山間・原野に部落を作つて、闘争しながら生活していた時代でも、隣の部落にどういうことが起りつゝあるかを知ることは、興味の上からばかりでなく、かれらにとり自衛上最も必要であつたに相違ありません。隣の部落の酋長が死んだとか、急に弓矢をたくさん作つたとかいうようなことを知つたものは、それを直ちに自分のなかまにふれまわつて歩いたことは容易に想像されます。

二 新聞の話

新聞の発生は、こうした人間の本能に基づくものであります。人間が文字を使用しはじめた時は、実質的には現代の新聞の第一号が、なんらかの形で、例えば個人間の手紙とか、政府の告示とかに現われ出した時であり、十五世紀の中葉に印刷機がドイツで発明された時は、現代の新聞の形態を持った新聞が現出する予告の時であります。

現代の新聞は、イタリア・ドイツ・イギリス・フランス等で、十六世紀の中葉ごろから漸次発達し出したものであります。その創始時代には、いすれも週刊の形で発行され、紙面にはその発行都市を中心として起つた政治上の事件などを主として、聞くがまゝ、見るがまゝ、思うがまゝ書きつらねるという程度のものであります。それが漸次発達して、言論機関として勢力を持つようになり、十九世紀以後は、主として政府に対する民間の機関として存在するようになりました。もっとも、時代により、国によつては、いわゆる政府の機関紙もあり、政党のそれもあります。いずれにせよ、世界各國の進歩とともに新聞も急速に発達し、ついに今日のように、どこの國でもその國力の大小強弱、あるいはその特殊性は、そのまゝその國の新聞により代表されるほどになつています。

日本でも明治維新とともに、現代新聞の機構は西洋文明の一つとして輸入され、第一次世界大戦以後急激に発展し、今日では日本も、発行部数の点から見て、世界でも一流の域に達しております。

新聞はだいたい以上に述べたような理由で発生し、発達して來たのでありますが、その発展は十九世紀の中ごろ以后において、ことごとくめざましいものがあります。その最大の原因是、この期間に世界の多くの文明國では、教育が庶民階級にまで一般に普及しはじめ、人間の知識と知識欲とが全体的に向上し、読む習慣が普遍化したためであります。

昔はどこの國でも、読んだり書いたりすることのできるものは、少數の知識階級に限られたものでした。それが、ほとんどだれでもできるようになつた結果、どこの國でも國民の大多数が新聞を要求するようになりました。この結果、注目すべき現象が新聞の発達の上に起りました。というのは、新聞が少數の知識階級のみに読まれていた時代は、政治や外交などの國政を主とした事件の報道とか、ことにそれに關する意見を中心とした社説・寄書等であったのが、読者の層が一般庶民階級にまで拡がつた結果、新聞が取り扱う事件の範囲は、著しく拡大されるにいたりました。

即ち、國家・社会の各方面に起る日常の事件で、それが讀者の最大多数に直接間接なんらかの利害関係があり、あるいは興味をひくものであれば、新聞はそうしたニュースの速報に全力を注ぐようになりました。こうして、一刻を争つてニュースを報道することが、アメリカ・イギリスをはじめ自由主義の國ではどこでも、新聞の不文律のようになつております。

こゝに一つ注目すべき重要なことは、前に述べたように、新聞は民間の事業として始められ、発達して來たものであります。その發達は「言論の自由」という土台ができたためということです。「言論の自由」は、イギリスでは早くも十七世紀の中ごろジョン・ミルトンが、フランス革命においてはミラボーが、唱道しはじめたもので、一口に言えば、人間はだれでも自分の信ずるところを公然と述べる権利があり、政府はこれに干渉したり、抑圧したりしてはならないということです。この「言論の自由」は近代文明的一大基盤で、新聞の重要性も新聞がこの上に立つからであります。

さて、世界の新聞は、前に述べたようにニュースを速報しようとする点で、ほとんど同じであります。

す。それなら、ニュースとはどういうものでありますか。これに關して、無数の書物が書かれ、議論が出ていて、一定した定義はありませんが、大づかみにいえば、

一、実際に起つた事件で、日常平凡なことなく、その發生が、時間的には新しく、地理的には近いこと。そして、發表が時機に適していること。

二、できるだけ多くの讀者に利害關係があり、興味を與え、かつ風教上に悪影響がないこと。

これを具体的にいふと、根拠のない想像は、それがいかに珍奇なものでも、ニュースとしての價値はありません。また、毎日くり返される新しい事実、例えば太陽が東から昇り西に没するということとは、人類にとりおそらく毎日の最も重要な事実であります。それは日常のことであるから、ニュースにはなりません。ねこがねずみをかみ殺したということも報道の價値はありませんが、その反対のことが起つたら、すばらしいニュースであります。

また、いかに現實に起つたこと、珍しいことでも、それがあまり古いことであつたり、遠隔の地の出来事であつたり、風教上に悪いことは價値がありません。鹿兒島の人には、北海道の千戸の火事よりも、自分の近くの十軒の火事の方が大きなニュースです。昨年、南アフリカの山中で五本脚のさるが発見されたということも、きのう、丹波の山中で三本脚のさるを捕らえたという方が、日本の新聞の讀者には二倍の興味があります。そして、この興味のあるなし、あるいはその程度の大小を判断するには、そのニュースがどれだけ多くの讀者により熱心に読まれるかを、判定することによつてきまるのであります。けさ、あるいはきのう起つたという政変・総選挙・國際會議の決定、殺人事件・大地震・水害等の記事などが、新聞により常に大きく扱われるのは、このためであります。

だいたいこういう標準のもとに、新聞のニュースは集められ、編集されるのであります。新聞の誇りとするのは、速報というところにありますので、そのためには大新聞社、ことに世界で新聞事業の最も発達しているアメリカの大新聞社では、あらゆる設備が用意され、また常に改善されつゝあります。分業と大量生産とは現代産業的一大特徴であります。大新聞社の組織はその代表的なものであります。ニュースを集めるためには、通信社があり、各新聞社には編集局があり、そこでは政治部・経済部・社会部・外報部（外國あるいは外交関係のニュースを扱う）・地方通信部（地方のニュースを扱う）・写真部等をはじめ、それ／＼幾つかの部門があつて、おの／＼専門的に材料を集めます。そして集まつたニュースは編集部（整理部ともいう）で取捨選択し、見出しを附けて印刷部へまわし、そこでは直ちにこれを活字に組み、紙型にとり、現代高速度印刷の最高峰ともいうべき輪轉機にかけ、一時間十万枚以上の速度で印刷します。そこから新聞が印刷されて出て来る光景は、文字通り急流の奔出するがごときものであります。

ニュースを原稿用紙に書き、写真を現像室に持ち運んでから、それが新聞に印刷されるまでは、急ぐ場合は二、三十分しか要しません。こうして敏活を期するためには、ニュースをとり、これを急送するため、大新聞社では、飛行機・傳書ばと・写真電送機等の設備を活用し、また、國內と國外とうにくふうしています。そうして得たニュースは、電話や電信で刻々に本社に送られるので、本社には常に夜でも宿直員がいて絶えずこれを接受し、事実晝夜の別なく一年じゅう活動しているといつてもいいのは、新聞社であります。

ニュースとともに、というよりもそれ以上に新聞にとって重要なのは、新聞を作つて行く上の主義方針であり、それが社説となつて現われ、記事の取捨選択、見出しの大小を定める基準となります。新聞は世界の大多数の國では、民間の企業でありますが、普通一般の企業と異なり、公衆・社会・國家の利益のために活動する——即ち、社会の公器として立つてなければ、眞よい新聞とはいません。近代の諸國家の歴史を見ると、大國には必ず良心的な、りっぱな大新聞があります。

このほか、新聞につき知つておくべきことは、新聞社には編集局のつぎに、営業局があることあります。これはだいたい販賣部と廣告部とに分かれております。販賣部は新聞を賣り廣め、その代金を集めのを仕事とします。廣告部は新聞へのせる廣告を集めのが任務で、新聞がその用紙代といした相違のない安い値段で賣れるのは、この廣告による収入利益があるからであります。日本の多くの新聞では、販賣と廣告とによる収入利益はおの／＼半ばしています。外國、ことにアメリカなどでは、廣告收入が全収入の大部分を占めています。

健全な新聞は常に独立した言論報道の公器であります。その独立性を保つためには、他からなんらの援助にもあらずからないことが必要で、それには営業として能率を擧げることが必要なのであります。よい新聞はよく賣れ、よく賣れる新聞は多くの廣告を集め、この収益によつて施設を高め、改善して行けるので、この意味で世界の多くの新聞社にとり、編集と営業は車の両輪のような関係にあるといえます。

（鈴木文史郎の文による）

マリーは、そのみちづれを失い、世界は、ひとりの偉人を失つた。雨とどろの中の、このむごたら
しい急死は、人々を驚かした。数欄にわたり、あらゆる國の新聞が、このドーフィヌ街の奇禍を、悲
痛な物語として記載した。同情の書信がケレルマン通りに山と積まれ、中には、名もない人々にまじ
つて、王や、大臣や、詩人や、学者の署名もあつた。こうした手紙や、記事や、電報の幾つもの束の
中には、眞実の情緒の叫びが見出だされた。

Lord Kelvin
William Thomson

ケルヴィン卿 1824-1929
キューリー・シキヨノオソロシイツウチカナシミニタエズ ソウシキイツアルワレラアスアサミラボ
ーホテルツク

ピエール・キューリーの助手セーリッシュヌヴォ

私どものうちのある者たちは、先生に眞実崇敬の念をさゝげていました。私にとりましては、先生
は、自分の親兄弟について、一番すきな人間のひとりでした。それほど先生は、そのつまらない協力
者をも、大きくこまやかな愛情で包むことができたのです。そうして、先生の限りない親切は、名も
ない使用人にも及び、その人たちから、先生は崇拜されていました。先生が急になくなられたと

いう知らせを聞いて、実驗室のボーイたちは泣きましたが、これほどすなおでいたましい涙を、私は
まだかつて見たことがありません。

新聞記者たちは、墓の間に身をひそめて、不透明なヴェールにおゝわれたマリーの横顔を待ち伏せ
した。

…キューリー夫人は、その義父の腕によりかゝり、夫の棺のあとから、かこいの壁ぎわの、マロ
ニエのかげに掘つた墓までついて行つた。そこで、彼女は、いつまでも固くすわつた同じ目つきで、
しばらくじつとしていた。しかし束の花が墓のかたわらへ持つて来られると、彼女は、急いでそれを
ひつつかみ、一つ／＼花をむしって、それを棺の上にまきはじめた。

彼女は、それをゆつくりと落ち着いてやつた。そして、深い印象を受けてなんの物音もざわめき
も立てなかつた会衆を、全然忘れてしまつたようになつた。

そのうちに、葬儀主任が氣がついて、列席のかた／＼の悔みをお受けしなければならないというこ
とを、キューリー夫人に知らせた。すると彼女は、持つていた花束を地面に落し、一語も言わずに墓
を離れ、そして、その義父のそばへ行つた。(ジュルナル紙 一九〇六年四月二十二日)

文部省直轄教授團

パリ大学、理学部、実驗主任、理学博士、ピエール・キューリー夫人、同学部、物理学の一講義を嘱託せらる。

キューリー夫人は、右の資格において一九〇六年五月一日より、年額一万フランの給料を受くべし。

これこそ、フランスの高等教育のうちで、一婦人に職が與えられた最初のことである。マリーは、自分が引き受けなければならない重い使命について、その義父がこまゝと話してくれたのを、うわの空で聞いていた。彼女は、たゞ一語、「やつてみましよう。」とだけ答えた。

かつてピエールの吐いた一句、それは、道徳的遺言であり、一つの命令であつたが、その一句が彼女の記憶にのぼつて来て、判然と彼女にその行手を示した。

——どんなことが起らうとも、たとえ、魂のなくなつた抜けがら同然になろうとも、やつぱり研究を続けなければならぬ。

マリーの日記――

人が、わたしにあなたのあとを繼げと言つて來ている。わたしのピエール、あなたの講義と、あなたの実驗所の指導とを、わたしは承諾した。それが、よいか悪いかをわたしは知らない。わたしがソルボンヌで講義をするようになるといいんだがと、あなたはよくわたしに言つた。それで、わたしは、

ひとつ努力して仕事を続けたいと思う。時には、そうする方が、わたしにとつて、一番生きやすいようにも思われ、また時には、そんなことをするのが、氣運いじみているようにも思われる。

佐々木に書かれてある

一日 沢山の事、一九〇六年五月七日

あかつきひりわたしのピエール、わたしは、どこまでもあなたのことを思う。わたしの頭はそのために鳴り、わたしの理性は乱れる。あなたを見ることもなく、二世を娶つたみちづれの微笑もなくて、今後も生きなければならぬとは――わたしにはわからない。

二日前から、樹木は葉を持ち、庭は美しい。けさ、わたしは、その庭で子供らに見とれた。そして、あなたがかれらを見たならば、さぞ美しいと思つたことだろう。そうして、花の咲いたきょうちくとうとすいせんを見せてくれるために、わたしを呼んだことだろうと、そんなふうに思つてみた。きのう墓地で、ふと、わたしは、石に刻んである「ピエール・キューリー」という語がわからなくなつてしまつた。郊外の美しさが苦しくなり、わたしは、またヴァニールを引きおろして、それを通してすべてのものを見るにした。

五月十四日

わたしのピエール、えにしだの花が咲き、ふじや、さんざしや、しようぶが咲きはじめていることを、わたしはあなたに言つてあげたい――たしか、みんなあなたのすきな花だつた。

わたしは、また、あなたの講座にわたしが任命されたこと、そうして、それをわたしに祝つてくれ

たまぬけもあることを、あなたに言いたい。

わたしは、もはや、太陽も花も好まないといふことを、あなたに言いたい。そういうものを見るとわたしの心は痛む。あなたが死んだ日のような暗い天氣の方が、わたしには感じがいい。そうして、わたしが、よい天氣を憎むところまで行かなかつたのは、わたしの子供たちに、それが必要だからです。

五月二十二日

わたしは、一日じゅう実驗所で働く。わたしにできることはそれだけだ。どこにいるよりも、わたしはそこにある方がよい。わたしには、もはや、おそらく学問の研究を除き、一身上の喜びを與えてくれるものは、何一つ考へられない——しかも、それすら、いなというのは、たとえ、わたしが成功するとしても、それをあなたが知らないでいるということに、わたしはたえられそうもないからです。

彼女は、断然はらをすえて、その夏じゅう実驗所で勉強し、そして、十一月に始めるはずの授業の準備をするため、パリにとどまることにきめた。ソルボンヌでの彼女の講義は、ピエール・キュリーのそれに負けないだけのものでなければならない。マリーは、かれの手帳や書物を取り集め、かれのこしたノートを調べた。もう一度、彼女は研究に没頭する。

この陰氣な休暇じゅう、彼女の娘たちは、田舎ではねまわつた。エーヴは、サン＝レミリレリシユヴルーズなるその祖父のもとで、イレーヌは、マリーの次姉ヘラリシャーライト海岸で。ヘラリシャーライは、マリーの手を助けようというやさしい心根から、フランスでこの夏を過ごそうと、やつて來ていたのである。

秋になつて、マリーは、ケレルマン通りにずっといることにたえられなくなり、新しい住所をさがし求めた。彼女は、ソーブに身を落ち着けたいと思う。ピエールが彼女に会つた時住んでいた所であり、かれが安らかにいこつてゐる所である。

有名な学者の末亡人、その夫がソルボンヌで担当していた講座に正式任命されたキューリー夫人は、一九〇六年十一月五日、月曜日、午後一時半から、その第一回めの講義をする。

キューリー夫人は、この開講講義では、ガス中のイオンの説を述べ、そして、放射能の解説をする。

キューリー夫人は、「階段講堂」で講義をする。

ところが、階段講堂は、およそ百二十人分の座席を擁し、その大部分は学生に占領される。一般的の聽講者や新聞雑誌記者は、それ故、やはり多少の権利は持つてゐるのだが、せいぜい二十人分ぐらいいの座席を割り当てられることになろう……。今度の事情は、ソルボンヌの歴史にあっても獨得な事情なのだから、この最初の講義だけは、なんとか規則を曲げて、キューリー夫人に、大講堂を使わせる

ようするわけには行かないものだらうか。

たゞ、もう少しもあつてよ
夫がうるさくするやう

右のような当時の新聞からの抜き書きは、この「有名な未亡人」がはじめて公衆の面前に現われたのを、パリが、どんなに興味深くしびれを切らして待ちもうけていたかを、如実に語っている。理科学院の事務所に押しかけて、招待券がもらえないのを憤慨する新聞記者や、社交界の人々や、きれいな婦人や、藝術家などは、たゞ同情からだけで動いているのではなく、學問をしたいのでもない。かれらには、「ガス中のイオンの説」などはどうでもよいのであり、この残酷な日のマリーの苦惱も、かれらの好奇心にとつては、とうがらしの分量をふやしたものに過ぎない。苦痛にまで俗人たちが附きまとう。

創設以来はじめて、一婦人がソルボンヌで話をするのだ、同時に天才であり絶望の妻である一婦人が。これこそ「初日」の聽衆を、晴れの日のお客を、ひきつけるだけのものはある。

正午、マリーが、ソーの墓地の靈前に立つて、きょう自分がその後を繼ぐ當の相手に、低い声で話しかけていた時刻には、すでに、聽衆が、小さな階段講堂につめかけ、理科大学の廊下をふさぎ、そろして、ソルボンヌの廣場にまであふれていた。講堂には、無知なやからとえらい人たちとが、また、マリーの親友たちと、なんでもない者らとが、入りまじっていた。一番歩の悪いのは、ほんとうの学生たちであつて、講義を聽き、ノートをとるためにやつて來たかれらは、人に場所を取られないよう、自分たちの腰掛にしがみついていなければならぬ。

「時二十五分。会話のざわめきが堂にみなぎる。さくやき、たずねあい、キューリー夫人の入場を、

何一つ見のがし聞きのがすまいと、首を伸ばす。そこにいる人々は、みな同じ思いだった。今度の教授、ソルボンヌが古來その教師として認容したたゞひとりの婦人の口をついて出る最初のことばはどんなだらうか。彼女は大臣に礼を言い、大学に礼を言うだらうか。ピエール・リ・キューリーのことを話すだらうか。もちろん、そうだらう。慣例では、前任者への賛辞を述べることになつてゐる。しかし、こゝでは、前任者は夫であり、共同研究者である。とてもやりにくい立場だ。どき／＼する、一世一代の瞬間……。

一時半。奥の入口が開き、かつさいの突風のうちに、キューリー夫人が講壇にのぼつた。彼女は頭をさげる。それはうるおいのない運動であるが、それでもあいさつのつもりである。立つて、その手は、器具でいっぱいの長いテーブルをしつかとつかみ、マリーは歓迎のあらしのやむのを待つていた。たちまちにして音がやんだ。彼女は、ちょっとあらためた顔になる。と、このあおざめた婦人の前で、何かしらある情緒が、見物のために來ている群衆をしんとだまらせた。

マリーはまっすぐ自分の前をながめ、そうして言つた。

「約十年このかた、物理学の方で達成されました進歩を考えてみます時……」といふ、この氷のようなことばのうちに、われくの思想のうちにひき起された動きに、驚嘆させられます……。

キューリー夫人は、ピエール・リ・キューリーがそのところでやめたちよどその文句で、自分の講義を始めたのである。

「物理学の方で達成されました進歩を考えてみます時……」といふ、この氷のようなことばのうちに、どんなに多くの悲痛なものが含まれてゐることだらう。涙が目にねき、ほおを傳わつた。

終始変わらぬなだらかな、ほとんど單調な声で、この女科学者は、その日の課業をしまいまでやつてのけた。彼女は、電氣の構造や、原子の崩壊、また放射性物質に関する新しい学説の話をした。無味乾燥な敍述をくじけずにやりおさせて、彼女は、はいりて來た時と同じくらい足ばやに、小さな入口から引っこんで行つた。

(エーヴリ・キュー原作—川口篤・河盛好藏・杉捷夫・本田喜代治の共訳による)

四 花より雨に

静かな山の手の古庭に、春の花は、支那の詩人が春風二十四番と数えたように、うめ、れんざよう、もゝ、もくれん、ふじ、やまぶき、ぼたん、しゃくやくと順々に咲いては散つて行つた。

明かるい日の光の中に燃えては消えて行くさまゝな色彩の変轉は、黙つてさびしくうちながめる

自分の胸に、悲しい物語のきわめて美しい一章一章を読み行くような軟らかい悲哀を傳える。

「われの悲しむは過ぎ行くことしの春のためではない、また來べき翌年の春のため。」とうたつたのはたれであつたか忘れてしまつたが、「春はわが身にとつて異なる秋にひとしい。」と言つたのは南國の人

の常としてことさらに秋を好むジャシリモレアスである。

空は日ごとに青く澄んで、よく花見帰りの午後から突然暴風になるような氣候の激変は全くなくなつた。日の光は次第に強くなつて、赤みの多いゆず色の夕日は、もうたそがれも過ぎ去るころかと思う時分まで、案外長くいつまでも、高いかしのこすえの半面や、または低く突き出たかえでの枝先などに残つてゐる。あるいはどこからさしこんで來るものとも知れず、植えこみの奥深い土の上に、ぱらぱらなはん点を描いていることもあつた。かゝる夕方に空を仰ぐと、冬には決して見られないうすねずみ色のうろこ雲が、名残りの夕日に染められたまゝ動かず空一面に浮いていて、草の葉をもそよがせないほどの軽い風が、食後に散歩する人を、いつか星のさえそめるころまで、遠く郊外の方へと連れて行く。

いづこを見ても若葉の緑は洪水のようにななぎりあふれて、日の光に照らされる緑の色の強さは、しめた座敷の障子にまで反映するほどである。どんより曇つた日には、緑の色はかえつてあざやかに澄みわたつて、沈思に疲れた人の神經には、軟らかい木の葉の緑の色からは、一種言いがたい、やさしい音響が発するような心持をさせることさえあつた。

わが家の古庭は非常に暗く狹くなつた。

しげつた木立はその枝をおゝう木の葉の重さにたえぬような、苦しげな悩ましげな様子を見せるばかりか、圧迫の苦惱は目に見えぬ空氣のうちにみなぎりはじめる。西からとも東からともほとんど方向の定まらぬ風が、突然吹きおりて突然消えると、こんもりした暗い樹木は、へびのうろこを動かすような氣味悪い波動を、うつ向いた木の葉のしげりからしげりへと傳える。おり／＼雨が降つて来ても、庭の地面は冬のように、すぐさまぬれはせぬ。ぬれるとかえつて土地の熱氣を吐き出すように、一帯の氣候をいやに蒸し暑くさせる。伸びきつた若葉のとがつた葉末から滴りもせずにとまつてている雨のしづくが、曇りながらもどこかしらべつと明かるい空の光で、宝石のようにうるわしく輝く。石

に蒸す青ごけにも木の根もとの雑草にも小さな花が咲いて、植えこみのかげには雨をよける蚊の群れが、雨の糸と同じようにこまかく動く。

雲が流れて強い日光が照りはじめるとすぐにいちごが熟した。びわの実が次第に色づいて、いちじくの葉裏には、もうはとの卵ほどの実がなつていた。日当たりの悪い木立の奥に、青白いあじさいが氣味悪く咲きかけるばかりで、もはや庭じゅういすこを見ても、花といふものは一つもない。青かづた木の葉の今は恐ろしく黒ずんで來たのが不快に見えてならぬ。古庭はます／＼暗くなつて行くばかりである。

ある日の夕方、近所の子供が裏庭のかきねをこわして、長い竹ざおでうめの実をたき落して逃げて行つた。別に不消化なものをたべたというのでもないのに、突然夜なかに腹痛を覚え、自分はふいと目を覚ましたことがある。その時戸外にはよほど前から雨が降つてゐたと見えて、点滴のひどきのみか、夜風が屋根の上にと、こずえから拂い落すまばらなしづくの音を耳にした。梅雨はこんなふうにいつから降り出したともなく降り出して、いつやむとも知らず引き続く……。

家じゅうの障子をこと／＼あけ放し、空の青さと木の葉の緑をながめながら、午後の暑さに草いぢごやさくらの実をむさぼつたころには、風に動く木の葉の乾いたひどきが、ことさらに晴れた夏という快い感じを起させたが、今降り続く雨の日は、深夜のごとくしずまり返つて、木の葉一枚動かず、ふだんは朝から聞えるさま／＼なまちの物音、物賣りの声も全くとだえている。午前の十時ごろか、ちょうど夕方のようになす厝い時、いつもは他の物音にさえぎられて聞えない遠い寺の時の鐘が、音波の進みを目に見せるようひどいて来る。すると、この寺の鐘は冬の午後によく聞きなれたひどいなので、自分の胸には冬に感ずる冬の悲しみが時ならず呼び起され、世の中には歎樂も色彩も何もないような気がして、取り返しのつかない後悔が倦怠の世界にひとりで跋扈するのである。

筆の軸はこゝち悪くねばつて、詩集の表紙はかびてしまつた。壁と押入から濕氣のにおいがわき出し、手箱の底に祕藏した昔の手紙を虫が食う。なめくじのはう縁側に、悲しいさびしいひきの声が聞える暮れ方近く、へやの障子は湿つて寒いので一枚もあけたくはないけれど、あまりのうす暗さにたえかね、縁先に出てたゞんでみると、雨の糸は高い空から庭じゅうの樹木をくもの巣のように根氣よく包んでいる。音もひどきも何もない陰氣ないやな雨である。

ちまたに雨の降るごとく、

わが心にも雨ぞ降る。

とガエルレーヌがうたつたような音樂的な雨ではない。この詩はひどきのつよい秋のしぐれを思わせるが、これに反して、現代に最も悲しい詩人といわれたベルギーのローダン・バッカが、

滅びしものの声なき涙のごとく、

死せし人のとざされし目より落つる涙のごとく、

と、色も音もないかの國の冬の雨をうたつたことばが、今最も適切に自分の記憶に呼び返された。

人の心は旗ざをよりぬれてさがりし、

その旗の色とてもなき檻櫻なりけり。

どうたわれたよう、動きもせぬ、ひらめきもせぬ。人の心はたゞ／＼さつて行くばかりである。

しかし、それら近世の詩人にとっては、悲愁苦惱はしば／＼何物にもかえがたい一種の快感をもたらすことがある。自分は梅雨の時節において、他の時節に見られない特別の恍惚を見出だす。ある夜非常におそく、自分は重たいからかさを肩にして、まづくらな山の手の横町を帰つて來た時、捨てられたいぬの子のあわれに鼻を鳴らして人のうしろについて來るのを見たが、多分そのいぬであろう、自分はうちへはいつて寝床についてからも、夜じゅう遠くの方で鳴いてはやみ、やんではまた鳴く小いぬの声を、これも夜じゅう絶えては続くあまだれの音の中に聞いた……。

雨はおり／＼降りやむ。すると空は無論すきまなく曇りきつていながら、日が照るのかと思うほどに明かるくなつて、庭じゅうの樹木は、しげりの輕重にしたがつて陰影の濃淡をあざやかにし、すべての物の色がたそがれの時のように浮き立つて來るので、感じやすい心は、すぐさま秋のたそがれにわれ知らずふけるような果てしのない夢想に引き入れられる。うす曇りの空の光に、日ごろは黒い緑の木の葉が一帶に秋のごとくすく黄ばんでしまつて、庭のかなたかなたに池のようになまつた雨水の面はまぶしいばかり澄みわたり、もうだいぶ紫の色もこくなつたあじさいの反映しているのがいかにも美しい。少しの風もないのにかなめのいけがきからは、赤くなつた去年の古葉が雨のしづくとともににしきりと落ちる。

すゞめの声がにわかにかしましく聞え出す。するとこれが雨の晴れ間に生きかえる生活の音樂のブレリュードで、この季節に新しく聞く苗賣りの長く節をつけ歌う声。続いてロシアのバン賣り。その賣り声をめずらしそうにまねする子供の叫びが、こなたからかなへと移つて行くので、バン賣りは横町を遠くへと曲がつて行つたことがよくわかる。冬にも春にも日ごろいつでも聞くまちの声は一時に遠く聞え出しだが、ほどもなく、再び耳もと近くブリキのといに屋根から傳わつて落ちるあまたのひびきが起る。自分ははじめて、目に見えないぬか雨の、空の晴れそうに明かるくなつているにもかゝわらず、いつのまにかまた降り出していたのに心づくのであつた。

びわの実は熟しきつて地に落ちてくさつた。かわやに行く縁先になんてんの木がある。その花はいかかる暗い雨の日にも、雪のよう白く咲いて房のようさがつてゐる。自分は小さい時この花の散りつくすまで雨は決して晴れないと語つたうばの話を思い出した……。

(永井荷風の文による)

五 山のあなた

春の朝

時は春、

日は朝、

朝は七時、

片岡に露みちて、

あげひばりなりいで、

かたつむり枝にはひ、

五 山のあなた

神、そらにしろしめす。
すべて世は事もなし。

落葉らくえ

秋の日の
ヴィオロンの
ためいきの
身にしみて
ひたぶるに
うらがなし。

鐘のおとに
胸ふたぎ
色かへて
なみだぐむ
過ぎし日の
おもひでや。

げにわれは
うらぶれて
こゝかしこ
さだめなく
とび散らふ
落ち葉かな。

山のあなた

山のあなたの空遠く
「幸」住むと人のいふ。
あゝ、われひとと尋めゆきて、
なみださしぐみかへりきぬ。
山のあなたになほ遠く
「幸」住むと人のいふ。

(ヴェルレーヌ原作——上田敏の訳による)

(ブッセ原作——上田敏の訳による)

私たちは南洋から東イングランドへ行く途中、暴風のため、ヴァンリーディーメンの國の北西の方へ流された。観測によつて南緯三十度二分の所に來てゐることがわかつた。船員のうち十二人は過度の労働と惡食のために死に、その他の者もひどく衰弱していた。十一月の五日というと、その辺では夏のはじめで、もやが深かつたが、水夫たちは船から五十ひろとない所に一つの岩礁を見つけた。しかし風が強かつたので、いきなり吹きつけられ、船はたちまちさけてしまつた。私を加えて船員六人、ボートをおろして、本船と岩礁から離れた。私たちは、推測すると、約九マイルほどこいだが、なにしろ本船にいた時すでに働き疲れていたので、もはやこげなくなつてしまつた。で、波のまにくうちまかせていたが、約半時間もすると、ボートは北から吹いて來たはやでひっくりかえつた。

ボートにいたなかまはどうなつたか、また本船に残つていた者はどうなつたか、また本船に残つていた者はどうなつたか、知るよしもないが、いずれはみんな死んだことだらう。私はどうしたかといふと、運にまかせて泳ぎ、風と潮に流された。時々足をつけてみても、底へは届かなかつた。しかし、もうほんとだめになり、どうすることもできなくなつた時、やつとせいの立つ所へ來ていた。その時は、あらしもずっと弱まつていて、底の勾配が緩かつたので、約一マイルも歩いて、やつと陸にあがつた。もう夜の八時ごろかと思われた。それから半マイルほど向こうへ行つてみたが、家らしいものも人らしいものも見つからなかつた。少なくとも、そんなものは目につかないほど私は弱りきつていてた。なにしろ疲れていたので、その疲れと、暑さと、太船を離れる時に飲んだ一合五勺ほどのブランディーのせいで、ひどく眠くなつて來た。草の上に寝ころぶと、ばかに短くて柔らかい草で、生まれて覚えのないほどぐっすりとよく眠つた。勘定してみると、九時間ぐらい眠つたわけである。といふのは、目が覚めるところまで夜が明け放れていたから。

起きようとしたが、動けなかつた。といふのは、あお向けになつたまゝ、両手と両足を右も左も大地にきつくつなぎとめられてあつたし、またふか／＼と長く伸びた髪の毛も、同じように結わえとめられてあつたので。それからまたわきの下からもゝへかけて、幾筋もの細ひもが胴体にかゝつてゐるのを感じた。上を向いたきりではあるし、太陽は暑くなつて來るし、光が目を痛めた。あたりに騒がしい声が聞えるけれども、そんな姿勢だから、空よりほかには、なんにも見えなかつた。しばらくすると何か生きているものが左足の上で動いているのを感じた。静かに胸の上を通り、あごの近くまで來た。で、できるだけ伏し目をつかつて見ると、身のたけ六インチにも足りない人間で、手に弓と矢を持ち、背中に矢筒を背負つてゐるのがわかつた。すると、今度は（推測では）少なくとも四十人の同じような人間がそのあとからついて來るのを感じた。私は非常に驚いて大きな声を立てると、みなあわてて逃げ出した。なかには、あとで聞いたのだが、私のわき腹から地面へ飛びおり、ころんと転がをした者もあつた。しかし、すぐ引つ返して來て、その中のひとりが、私の顔のよく見える所まで來ると、感嘆したように両手と目をあげ、鋭いはつきりした声で、ヘキナードガルと叫んだ。ほかの者も同じことばを幾度かくり返した。しかし、その時はなんのことだかわからなかつた。私はその問じゆう、読者も察してくれるだらうが、非常な不安で寝ていてた。ついに逃げ出してやろうとも

がくと、運よくひもが切れ、左腕を地面にしばりつけてあつたくいがぬけた。その腕を顔のところまで持つて来てみて、しばり方がわかったので、同時に、はげしく引っぱると、今度は髪の毛を左の方で結わえとめてあつたひもが少し緩んだ。それで顔を一インチばかり振り向けることができた。しかし、やつらはまたもや逃げ出して、つかまらなかつた。その時、非常に鋭いアクセントで大きな叫び声がして、それがやむと、その中のひとりが、トルゴーフ・オナクと高く叫ぶのが聞えた。すると、百本以上の矢が左の手先に、同じ数の針がさへつたようになたつたのを感じた。それから今度は空に発射すると、その多くは私のからだの上に落ち（感じはしなかつたが）、また顔の上に落ちたのもあつた。もつとも、顔はすぐ左手でおとつたけれども。その矢の雨がやむと、私は悲しさと痛さでうめき出した。そうして、また逃げ出そうとする、第二の一せい放射を前よりもひどく受けた。なかには、やりでわき腹を突いたやつもあつた。しかし運よく私は革のうわ着を着ていたので通らなかつた。これはじつとしているのが一番りこうだと思った。なんでも夜までそうやつていれば、左手はすでに解けているのだから、容易に逃げられると思つた。また住民どもについていうならば、たとい、どれほどの大軍で押し寄せてても、今見たくらいの大きさの人間どもなら、十分に対抗しえられると思われた。しかし、運は思うようには向いて來なかつた。

人々は私がじつとしているのを見ると、もう矢は放たなかつた。しかし耳にはいる音によつて人数のふえたことがわかつた。そして、私の所から四ヤードほどの、ちょうど右の耳の向こうあたりで、大勢が動いているような物をたく／＼音が、一時間以上もしていた。それで、くいとひもの許すだけそつちへ首を振り向けて見ると、地面から一フィート半ほどの高さに演壇が作られ、この國の人間が四人ほどあがれるようになつて、はしごが二つ三つかゝつていた。その壇上から、その中で一番えらそうに見えるのが、私に向かって長いこと何か演説したけれども、一言もわからなかつた。しかし、言い落してはならないが、そのえらそうな男は、演説を始める前に三度ラングローデフルーサンと叫んだ。（そのことばも前のことばも、あとでくり返されて、説明された。）すると、たちまち五十人ほどやつて來て、頭の左側を結わえつけてあつたひもを切つた。それで自由に顔を右に向け、演説する男のふうさいや身振りを觀察することができた。年のころは中年で、そばについているほかの三人より一段とせいが高く、三人の中のひとは小姓で、そそをさゝげているのが、私の中指よりいくらくらい大きいだつた。あのふたりは両側にひとりずつ立つて、かれに附き添つていた。かれは雄弁家のあらゆる技法をつくした。おどすような調子があつたり、また約束するようなあわれむような親切なような調子があつたりした。私はことばずくなに答え、最も從順な態度で、左の手と両方の目を太陽の方へあげ、太陽を証人に立てるようにして答えた。そして、本船を離れる何時間も前からなんにも口にしていらず、ほとんど餓死しそうになつていていたので、自然の欲求に迫られ（やかましい礼儀作法にはそむくことになるだろうが）、がまんができなくなつて、何か食いたいということを示すために指を何度も口のところへ持つて行つて見せた。するとブルゴー（あとでわかつたのだが、高官のことをそう呼ぶ。）は私の意味することを非常によく理解した。かれは演壇からおりて、私のわき腹にはしごを幾つもかけろと命じた。その上を百人以上の人間が登つて來て、はじめに私のことが報告されるとすぐ國王の命令によつて用意されて運ばれてあつた肉のかごをかついで、私の口のところまで歩いて來た。見るといろんな動物の肉があつたが、味わい分けることはできなかつた。肩の肉も、脚の肉も、

腰の肉もあり、羊肉の形に似てよく料理されてあり、大きさはひばりのつばさよりも小さかつた。私は二きれ三きれずつ一口に食い、鉄砲のたまの大さほどのパンを一度に三つずつ食つた。かれらはできるだけ早く供給しては、私の大きさと食欲に驚嘆していた。

私はその次に何か飲みたいと、もう一度、手まねをした。かれらは私の食いぶりによつて、少しぐらいの分量ではまに合わないことを知つていた。それに、非常にわかりのよい人間たちだつたので、一番大きいたるを巧みにつるしあげ、私の手もとへころがして来て、鏡を打ち抜いた。私はそれを一息に飲んだ。一合五勺ほどもはいつていないので、わけもないことだつた。味はバーガンディーの軽いぶどう酒のようで、それよりもずっと風味がよかつた。二つめのたるが來た。それをも同じようにして飲み、もっと飲みたいと手まねをして見せたが、もうなかつた。

私がそういった不思議なことをやつてのけると、かれらは歎声をあげ、私の胸の上ではねまわりながら、はじめのようにヘキナーデガルを何度もくり返した。かれらは手まねで、二つのたるを投げ落せと私に合図をした。しかし、まず下にいる人たちに、ボラクームガオラーとどなつて、わきへのくよう警戒しておき、それからたるが空高く投げ出されるのを見ると、一同口をそろえてヘキナーデガルを叫んだ。

白狀すると、私は、かれらが私のからだの上を行つたり來たりしている時、手ぢかなやつを四、五十人つかんで地べたへたへきつけてやろうかと何度も思つたのだが、また考えてみると、かれらにされたことが、そんなにひどいことであつたというわけでもあるまいし、私としてもかれらに名譽にかけての約束をしているし（私の服従的態度を自分でそう解釈したので）、そう思うと惡念はたちまち去つてしまつた。その上、接待のおきてにより、これほどの費用と儀礼をもつて取り扱ってくれる者どもには、負うところがあるようにも考えられた。それにしても思いめぐらすと、こんなちっぽけな人間どもが大胆不敵にも私の五体の上に登つて歩きまわり、しかも私の片手は自由がきくのに、かれらからすればこんなに見えらい大きな生き物ともいうべき私を見ても、ふるえあがるような氣色のないのが不思議でならなかつた。

しばらくして、もう私が肉をほしがらないのを見て取ると、私の前には皇帝陛下から遣わされたひとりの高貴の人気が現われた。その貴人は十二人ほどの家来を従え、私の右足の小指を登つて、顔のところまで進み寄り、玉璽のすわった國書を取り出し、それを私の目の前にさしつけ、約十分間少しも怒つたような様子もない、むしろ一種の断乎たる決心をもつて、時々向こうの方を指さして話した。それはあとでわかつたのだが、約半マイル離れた首府をさしたので、そこへ私は連れて行かることに会議が一決し、陛下の同意を得たといでのであつた。私はことばずくなじみ答えたが、わかるはずもないでので、らくになつている方の片手を今一つの手の方へ（貴人の頭越しに、たゞし貴人にも従者にもけがをさせないように氣をつけて）持つて行き、次に私の頭とからだの方へ持つて行き、自由にしてほしいという意味を示した。貴人にはその意味がよくわかつたようだつた。というのは不承知のしるしにかぶりを振り、手まねで私を捕虜として引いて行くということをして見せた。しかし、また別の手つきで、肉や飲み物はいくらでも取らせる、待遇は十分よくしてやるということを示した。それで、私はまたもや網を切つてやろうかと考えた。けれども、さっきの矢がまだ顔や手に刺さつて、みゝずばれになつて痛んでおり、投げやりもまだ刺さつたまゝであり、敵の人数もふえていることを感じた

ので、どうにでも言ひなりにならうと手まねで知らせた。それを見ると、ブルゴーと從者はいんざんに喜びの色をなして引き取つた。

まもなく歎呼の声があがつて、ペプロムーセラムということばが幾度もくり返されるのが聞えた。氣がつくと、非常にたくさんの人数の者が私の左側で綱を緩めていた。それから、かれらは私の顔と両手を非常によいにおいのする軟膏ゼルビコみたいなもので塗つたので、数分間たつと、矢の痛みはすっかり去つてしまつた。そういったわけで、それに加えて、さつきのたべ物と飲み物に栄養づけられて元氣づき、私は眠らされてしまつた。あとでわかつたのだが、約八時間眠つた。それも不思議はないことで、医者たちは皇帝の指図により、眠り薬を洒だるの中へませておいたのだった。

はじめ私が上陸して大地に寝ころんでいるのを発見された時、皇帝は急使によつていちはやく知るゝ、御前会議を開いて、前に述べたような状態に私をしばりつけ（それは私の眠つているうち、夜の間に行われて肉と飲み物をたくさん送り届け、私を首府へ運ぶべき機械の用意をするよう）に決議したものらしい。この決定は、あるいははなはだ大胆に危険に見えるかも知れない。また同じような場合としても、ヨーロッパの君主からならば、だれからも断然そんなまねはしてもらいたくない。けれども、私の見たところでは、それは非常に慎重でもあり、かつまた寛大でもあつた。というのは、この人たちが私の眠つている間に、やりや矢で私を殺そうとしたと仮定してみると、私はきっと最初の痛さで目を覚まし、そのはずみに、おこつて力まかせにあればたら、しばつてあつた綱を引っ切つたに違いない。そうなつたら、かれらは抵抗することはできないのだから、もういかなるあわれみをも期待することはできなかつたはずである。

この國の人たちは非常に数学にすぐれており、學問の保護者として知られている皇帝の獎励によつて、機械学のごときにおいては大いなる完成に達している。この君主は樹木その他の重い物の運搬のために、車輪のついた機械を幾つも持つてゐる。木材のできる森の中で、しば／＼長さ九フィートもある最大の軍艦を造り、それをそいつた車台にのせて、海まで三、四百ヤードも運ばせたことがある。それで五百人の大工と機械工がすぐ仕事にかかり、これまでにない大きな車台をこしらえた。地面から三インチあがつた木のわくで、長さ約七フィート、幅四フィート、二十二の車輪で動くことになつてゐた。私の耳にした喚声はこの車台の到着した時のことで、それは私が上陸して四時間たつと動き出したものらしかつた。それが私の寝ている横手に平行に持ちこまれた。しかし何よりやつかいなことは、私のからだを持ちあげて、その車の中に入ることだつた。そのため高さ一フィートの棒が八十本立てられ、からげ糸の太さの、非常にじょうぶな綱がたくさん縛帶にかぎで掛けられた。その縛帶は人夫たちが私の首・両手・胸・両足のまわりにまきつけてあつたのだ。九百人の最も強壯な男たちが働いて、棒に取りつけてある滑車でその綱を引っぱり、三時間足らずで私のからだはつりあげられて、車台の中へ落されると、そこにしつかぢとくゝりつけられた。これはみな聞いた話であつたのだから。皇帝の最大の馬が五百頭、いずれも、たけ四インチ半ほどのが使われて、私を首府の方へ引いて行つた。首府は前に言つたように半マイル離れていた。

出かけてから四時間ほどたつと、私ははなはだこつけいなことで目を覚ました。というのは、車に何か故障があつてそれをなおすためにちよつととまると、二、三人の若い者が私の寝顔を見たい好奇心

から、車台へよじ登り、そっと私の顔のところまで進んで來たが、その中のひとりの衛兵の士官が、手やりのきつさきを私の左の鼻の穴へかなり深くさしこんだ。わらしへのようにくすぐったかったので、私はひどくしゃみをした。するとやつらは見つからないように逃げ出したが、三週間たってから、私はその時急に目を覚ましたわけを知つたのである。私たちはその日は終日長い道中を続け、日が暮れてとまるとき、両側には五百人ずつの衛兵が、半数はたいまつを持ち、半数は弓矢を持ち、もし私が動こうとしたら射ようと身構えていた。次の朝は、日の出に道中を続け、ひるごろ、町の門から二百ヤードとない所に着いた。皇帝も宮廷の人たちもみな私たちを出迎えた。しかし大官たちは決して皇帝が危険をおかして、私のからだに登つたりしないようにした。

車のとまつた所には、全國第一といわれる古い大寺があつた。それは数年前、あるいまわしい殺人事件で汚されたので、この國の人たちの氣持から不淨と認められ、それで雑用に使われることになり、莊嚴も装具も運び去られた。その建物の中に私は寝起きすることにきまつっていた。北向きの大門は高さ約四フィート、幅二フィートばかりで、私には容易にくぐれた。門の両側には、地面から六インチとない所に小窓が一つずつ附いていて、その左側の小窓の中へ、王家のかじ屋が九十一鍵の鎖を通した。ヨーロッパの婦人たちの時計の鎖に似て、大きさもほとんど同じくらいで、それが私の左足に三十六箇の錠前でとめられた。

この寺と向かいあつて、大通りの向こう側二十フィートの所に、高さ少なくとも五フィートの一つの塔があつた。そこへ皇帝は宮廷の重臣たちを連れて、私を見物するために登つたということだ。もつとも、私の目にはつかなかつたけれども。うわさによると、十万人以上の住民が同じ用向きで町から出て來たそうだ。そして、私には衛兵がついていたにもかゝわらず、前後数回にわたり、私のからだに、はしごをかけて登つたやつが、一万人をくだらなかつたと思う。しかし、すぐに布告が発せられ、死刑をもつてそれを禁止することになった。人夫たちは私が抜け出すことはできないと見ると、私をしばつてあつたすべての綱を切つた。で、やつと立ちあがつたが、これまでに覚えのないゆううつな氣持だった。しかし、私が立ちあがつて歩くのを見た時の人々の騒ぎと驚きは、ことばにつくせない。左足をつないのである鎖は長さ二ヤードほどあつたので、自由に半円形に歩きまわれるばかりでなく、結わえつけられてあるのが門の四インチほど内側だったので、寺の中へはいこんでながくと寝そべることもできた。

(スヴィフト原作—野上豊一郎の訳による)

七 身振り語と言語

一 言語とは

ことば即ち言語は、本来人間がその心を音声に表わしたもののが、くり返しくり返されてその音声の形が定まり、それがお互の間の心を傳える一種の符号となつたものです。たゞし、音声のほかに、なお、心を表わす方法はあります。その一つは形象をもつて表わす方法で、形象の表現力を美的に発達させたものが絵画・彫刻となり、知的に発達させたものは文字となつて言語表現の大なる補助をなしています。

次には、目つき・顔つき・手まね・足まねの類、一口に言えれば身振りのしかたがあります。今なお人類は、話しながら顔をやわらげたり、緊張せたり、手を振ったり、こぶしを握ったりして言語表現を助けています。しかし、これを單に助けとして用いるにとどまらず、もっぱらこればかりを続けて相当の長さの会話が交換されたら、こゝに、言語と同等な効力を持つ身振り語が生まれます。

身振り語は、現に、音声の恵みを受けない不幸な人々の間に行われているのみならず、未開種族の間にも行われてることが報ぜられています。オーストラリア土人がその一例であつて、人類学の本などに、よく見うけることあります。狩からもどる夫を、妻が戸口へ迎えて遠くから、獲物があつたかと身振り語で問うのに、夫も身振り語で、「きょうはだめ、たつた三羽だけだ。」などというほど会話なら、今なお、しばしく行われているそうです。またアメリカインディアンも有名です。部落の間に、方言の差があまり大きく、ことばが通じにくくなっているところから、身振り語が自然に発生して行われているということです。

さてこの身振り語を、われの言語と比較してみると、われの言語の特色をはつきり理解する助けとなります。

二 音声と身振り

まず、音声と身振りとを比較対照してみますと、互にその間に長短がありますが、音声は、耳に訴える方法であつて、見えないから、概して意味が抽象的になつてわかりにくいものですが、身振りの方は、目に訴える方法で、具体的で、意味がわかりよいものです。このことは簡単に実験できます。

即ち、何かある物を、音声と身振りとをもつて表わして比べてみる——例えば、「鼻なら鼻」ということを、もし新規に創意をもつて表わすのに、音声ではなんと発音したら、相手が「鼻だな。」とわかつてくれましょうか。すでにできあがつていて、「はな」という語を用いるなら、すぐわかつてもらえますが、すでにできあがつていて、自分であらたにくふうして、鼻とわかつてもらえるような発音をするということは、いかなる知恵者といえども考えつくことができません。しかし身振りをもつて表わすならば、きわめて容易にできることです。即ち、手をもつて鼻をつかんで示せばよい。もしくは指で鼻をさして示せばよい。「指さす」ということは、「つかむ」動作の弱まつた形で、同義であります。「あ、鼻だな。」とすぐ相手にわかります。同様に「頭」なら、頭を指さして示す。「脚」なら脚を指さして示す。「机」なら机を指さし、「いす」ならいすを指さす。こうして何物でも、たゞ指さすだけで簡単に表わし示されます。

「見る」「聞く」「考える」などといふはたらきを表わそうとするにも、音声では表わしようがないのに、身振りでは、はなはだ簡単にできます。見るまねをして見せる。例えば、じいっと前方へ目を注いで見せる。「聞く」なら、耳をそばだてて聞くまねをして見せる。あるいは、手をかざして耳へ添えなどして見せてもよろしい。「考える」なら、考える時のまねをして見せる。例えば、腕を胸もとに組んで、首を右へ左へ、交互にかしげて見せる。それだけで、「あ、考えてるな。」と相手にもわかります。

身振りといふものの、かようによその意味があらわであつてわかりよいわけは、もと人間の本能的な表出運動そのものに基づくからです。無言劇、バントマイムといふものは、即ち、身振りのこの

性質を利用して藝術化したものです。舞台の中央にきつねの面をつけた役者が立つとする。向こうの方から百姓の翁が出て来る。きつねがその方へ顔を向けたが、たちまち、きつと向きなおり、足ばやに反対の方へ二、三歩動く。なんにも言わなくても、見物人はこれを見て、「きつねが翁を見たな。」「驚いたな。」「逃げたな。」と合点するのであります。

もつとも、身振りの中にも、實際、おしの間に行われているものの中には特殊なものもあるので、そろそろわかりよいものばかりではありませんが、たいていはわかりよいものです。

三 身振り語

だいたい、身振り語を分けると、次の四通りからでけています。

- 第一 指示
- 第二 模倣
- 第三 象徴
- 第四 符号

指示は最も意義めいりょうで、模倣がこれに次ぎます。象徴となると少しめんどうですが、連想のはたらきで、どうやら了解が成り立つのです。例えば、自分の鼻を指さして「自分」を意味する類。鼻を指さして鼻を意味する時は第一に属しますが、自身のうちで、顔が一番代表的であり、顔のうちで、鼻が中央に位するので、この鼻をもつて自身全体を代表させる。この時の意味は、象徴的なのです。なお親指と人さし指とで輪を作つて、それで「円」または「輪」を表わすならば、第二に属するので

すが、これが貨幣を意味することがあります。もつとも、これはおしでなくとも、まゝやることです。「これ、持つてあるか。持つてあるなら少し貸してくれ。」など。相手が「あゝ持つてあるよ。」と言つて、紙幣を出して貸すとする。「ありがとう。」と借りる。即ち、まるいものでお金を意味したのですから、こういうのも模倣から出て、象徴に進んでいるのです。かように、四つに分類はしましたが、実際の場合は、二つぐらいを兼ねて行わることがよくあります。

その他、くちびるを指さして赤を表わし、歯を指さして白を表わすのも象徴であり、親指をもつて大を表わし、小指をもつて、小を表わすのも象徴であります。さらに親指で「主人」を、小指で「主婦」を表わすのも、また親指で「強」「善」を、小指で「弱」「惡」を表わすのなどにいたつては、いよいよ象徴的表現です。

象徴には、形式と内容との間に、内的関係が存在するのでありますが、第四の符号となると、こういう内的関係はなくて、全く外部の事がらと身振りとが偶然結合してそれを表わすことになつて來ます。それについてはこういう例があります。あるドイツのおしの学校で、生徒たちが、イギリスを表わすのに握つた両手をそろえて前方へ差し出し、フランスを表わすのに開いた手を首にあてる形をしていました。いかなる理由でそうやつてゐるのか、わかりにくかつたのですが、それは生徒たちが、イギリスについて注意していたのは、毎年チームズ河におけるオックスフォード・ケンブリッジ両大学のボートレースに、ことしはオックスフォードが勝つたとか、ことしはケンブリッジが勝つたとかいう、新聞紙上の電報の記事だつたのです。たま／＼そういうことから、ボートをこぐスタイルでイギリスを表わしたのだということです。フランスについてはかつて歴史を学んだ時に、ルイ十六世が

人民の手により断頭台上で処刑されたという條が、生徒たちに最も深い感動を與えたので、そのためには首を切斷する身振りでフランスを想起しあつていたのでした。こういう表わし方は即ち偶然にそうなつたもので、これが符号の例です。これらは、局外者には全くわからない身振り語であります。

こんなんあいで、おしの身振り語にも、われの言語同様に、時には意義の変遷もあるのであります。そうなると、なおさらそれは他の人には全くわからないものになります。

四 身振り語と音声語

そこで、いよ／＼身振り語と、音声から成るわれ／＼の言語とを対照してその相違を見ることがあります。

まず、われ／＼の言語との第一の相違は、單語のつらねかたの順序、即ち語序です。身振り語では形容詞が原則として名詞の後へ來ることです。例えば、「青い箱」と言うには、「箱・青」の順につらね、「赤い鳥」と言うには、「鳥・赤」の順につらねる。これはどこの國のおしでもみなそぞうだと、英國の言語学者スウェイートの言語史(History of Language)とくらべて、小さな言語学の名著にいっています。なおそれ以前、同じ英國の人類学者のタイラーの有名な著「原始文化」(Primitive Culture)の「身振り語」の章にも見え、また同じ著者の「人類創世史の探究」(A Research in the Early History of Mankind)は、「身振り語」に、二章をさいて、いっそく詳細にこのことを論究しております。

日本のおしの身振り語もそうであることが、筆者自身の経験によつても、確かめられております。今は故人となつた吉川春水という川合玉堂門下のおしの画家と、その郷里の仙台の家で会つた時のこ

とでした。筆者は、その人の東京での住まいを尋ねようとしたら、母堂が通弁してくれました。その通弁の身振り語を筆者は今なおはつきりと記憶しています。即ち母堂はその時、左の手に長ぎせるを持つてたばこを吸つていたので、右手だけを使いました。右手を伏せて差し出し(少し傾けて)、次にはあごをしゃくつて、春水氏を指さし、第三番めに、右手を高くあげて遠方を指さす身振りをし、第四番めには、またあごをしゃくつて筆者を指さし、最後に、自分の顔を傾けて目も口もあけっぱなしにして終つたのです。すると、春水氏はにっこりして、ふところからいつも用意してある鉛筆と紙片とを取り出して、東京市小石川区水道端町百何番地と書いて私によこしてくれました。その間ほんとうに一瞬、実になめらかに母堂の身振り語が了解されたその軽妙さに、私は感嘆しました。第一番の平手を伏せてかしげた身振りは、屋根の斜面を表わして、家のことだったのです。その次に、「おまえ」とあごで春水氏を指さし、その次は、「あちらの」の意味で、遠方を指さしたものだったので、「家、おまえの、あちらの」即ち「東京のおまえの家」なのです。その次に、筆者をあごで指さして、「この人が」を示し、顔をかしげて目も口もあけたのは、人が物を聞く時の答を待ちもうける表情そのものをやゝ誇張してやつたので、「この人が、たずねる」とつづつたものにほかならなかつたのであります。家、おまえの、あちらの、この人、きく」という語序です。

タイラーによると、身振り語には、例えば「何」「だれ」というようなことばがないのだそうです。それで、例えさ「きみはけさ何をたべましたか。」とたずねるのに、「きみはけさ、飯をたべたか、もちをたべたか、そばをたべたか、パンをたべたか、うん。」というようにまわりくどく言わなければならず、また「ねばならぬ」というようなことばがないから、そこで「教場では静かにせねばならぬ」

と言うには、「教場では、騒ぐ——いけない。しゃべる——いけない。動く——いけない。けんかをする——いけない。黙つてゐる——そうです。」と言わなければならぬそうです。反対のことをたくさん並べて否定すると、たくさん並べるほど意味が強くなつて、肯定した一つだけがそれだけ強調され、はじめて「ねばならぬ」の意味が表わされるのだそうです。こうまわりくどいことを言わずに、われわれが「何」と言い「ねばならぬ」と言って表わしあることを考えると、いまさらながら、祖先がそういう單語をくふうしておいてくれたことが、ありがたく反省されて來ますと同時に、いかにわれくの言語の表現がうまく軽妙に言いなされるものであるかといふことが興味深く感ぜられて來ます。直接で意味があらわな身振りでは表わしがたい思想が、かえつて、間接であつて意味のわかりにくい音声の方で表わしうるようになつたことを思いあわせると、言語といふものは、いつの世に、どんなにして始められたものか、だれが発明したものか、いずれ、もとは、やはりそれに生活した長い／＼時代をへて、必要から生まれ、だれが始めたとも知れず、こうして使いならされて、平常はその軽妙さをも、ありがたさをも、気がつかずにいることではあります、が、ずいぶん不可思議靈妙なものであると言わなければなりません。

五 起原は同じか

さて、身振り語にも、ひとりでには意味のわからないものが、中にはありますが、それでも、身振りといふものは、概して音声よりはわかりよくできている——少なくとも、わかりよいものが音声より身振りの方に多いのであります。

この点から、「身振り語がまず生まれて、後に言語が生まれたものであろう。言語以前に、まず身振り語が存在したはずだ。」と説く一派の言語学者があつたのです。果たしてそうでありましょうか。ずいぶんわれくの言語の中には、まず身振りで表現して、それを言語にしたものがあります。「一」「二」「三」「四」の語原はまだわからませんが、五つ（いつ）という語はあまたの國々の語では、「手」という名詞と同形です。これは、「坊や、あとし幾つ。」と言うと、五歳の子が片手を突き出して見せるように、まだ「いつ」という数詞ができあがらないころ、手を出して「五」を示した時代があつたためと解釈されるのであります。

この推測を裏書きする事実が、アメリカインディアンの中にも見られます。あるアメリカインディアンでは、数詞はまだ一つ二つ三つまでしかできあがつていず、それ以上の数は指をもつて示し、五つの時は片手を出し、十には両手を出し、二十には両手をだらりと下へ向けて、足の指と、合算してくれといふ態度を示す。もう少し進歩したインディアンでは、一つ二つ三つ四つ五つがあつて、その五つの語は、「手」という語であり、六つは「いま一つの手へ一つ」と言い、七つは「いま一つの手へ二つ」と言い、同様にして十を「両手」、十一を「足へ一つ」、十二以上は「足へ二つ」「足へ三つ」「足へ四つ」等々。さて十六以上を、「いま一つの足へ一つ」「いま一つの足へ二つ」「いま一つの足へ三つ」と言って表わし、二十は「ひとり終る。即ちひとり分。」と/orつてそれ以上の四十、六十、八十、百を、「二人分」「三人分」「四人分」「五人分」と言います。

かようにして、明らかに数を言い表わす語などは、語ができる以前、身振りでそれを表わしていたことを証明しています。その他、われくの今日の語の中にも、身振りを言語にして、「うなづく」

と言つて承知を表わし、「かぶりを振る」と言つて「不承知」を表わす言い方などがあつて、身振りが先んじた表現も確かにあります。

しかしながら、すべての單語はみながみな、そういうふうにばかりはできていないのです。すべての單語ができる前に、もし、身振り語のみで人間が心を表わしあつたとしたら、音声を持つ人類が、みなおしのように黙りこくつて手まねなどのみをやつていたということになるのでしょうか。鳥獸でさえも、身振りばかりでなしに音声を発してさえずりかわすのです。音声を持つ人間が、音声を出さずに暮らしたことは考えられません。すべての器官というものは、用いられてのみ進歩するものであつて、決して完成してからはじめて用いられるものではないのです。だから、不完全言語の時代から、だん／＼用いられて、この音声言語が進歩発達をしたものと考えなければならぬのであります。

ことに、音声の方にも、少数ながら、ひとりでに、意味のわかるようなものも、存在するのであります。例えば、喜怒哀樂の自然の叫び、即ち間投声（Interjection）というものは、やはり本能の叫びであつて、万人共通の自然的なものですから、通弁を要せずして、異國人どうしにさえわかるのです。次には外界の音を、われ／＼の音声でまねるもの、即ち擬声または写声（Onomatopoeia）です。どん・がら／＼・かん／＼・かあ／＼・ちゅうちゅう。わん／＼・にやあにやあの類です。こういう音声は人爲的で、わかりよさという点では、間投声ほどではないにしても、なお外界の音に基づいていて半分は自然ですから、やはり環境のあい近い間がらにあつては、通じることができたはずです。なお、外界の事物には音響を伴なわないのに、それを象徴的に音声で表わす、びか／＼・くる／＼・ちらちら・ぬる／＼の類になると、もはや全く人工的になつて來るので、わかりよさはぐつと落ちます

が、同じ環境の人どうしには、あい近い連想がはたらくので、理解されることもあります。

以上のような種類の音声は、相当理解されやすいもので、そのこと／＼が身振りほどわかりよくはないにしても、少なくとも第一の間投声などは、わかりよさはほとんど身振り同様で、ある人々は、これを音声身振り（Sound-gesture）と呼んでいるくらいです。ことに、鳥や獸や、そういうものが目前にいる時なら、指さしても示されましょうが、目の前にいない時には、身振りをもつてどうして表わしましようか。翼で飛ぶまねをして見せたとて、からすやら、すゞめやら区別しがたい。そこを擬声で表わせば簡単に、かあ／＼とか、ちゅうちゅうとかですぐ表わせます。いぬ・ねこ・うし・うまの類をも、わん／＼・にやあ・もう／＼・ひん／＼ですぐ表わせます。その点、原始時代だとて同様なはずですから、原始時代からも、人間は、その場その場によつて、ある時は身振り、ある時は音声を用いたことでしよう。いや、多くの場合、むしろ両方があわせ用いられ、あい補つて意味を表わしたものと考えられます。今でもものを言う時、どうしてもわれ／＼は全然身振り抜きで言うことができないことでもそれがわかります。即ち、音声を発しながら同時に身振りを行つて、いざれを主、いざれを從とも言いがたい中から、長い年代の間に音声が主になつてしまつて、人類の言語ができあがつてしましました。それについてほ、また、音声そのものに、他の点で身振りにまさる長所があつたからです。

六 音声の身振りにまさる点

第一に、身振りは目に訴える方法ですから、光線のある所でなければ用いてもむだです。月のない夜などはだめ。晝にしても、間にじやま物があつて隔ててはまたなんの効もない。光線があり、じやま物がないとしても面々あい対していないとやはりだめ。横を向いている人にいくら目くばせしても、おいでおいでをしても通じないからです。然るに音声は、すべてこれらの條件をこえて有効であります。まつくなやみの中でも聞え、へいや壁のかけからでもわかり、そっぽを向いている人にも通じます。

第二に、身振りは仕事に手足を取られて、行きないことがたび／＼あります。重い物を両手にかへえているとか、手を動かして泳いでいる時とか、木登りさいちゅうとか、共同の敵に対して武器を持つているとか、右手にかさ、左手に弁当とか、そういう場合行えないことが実際多いのに、音声の方は、どうせ生息するために片時も休むことのない呼吸の息を利用するものですから、その準備は、いつでもできているのです。眠っている間でも呼吸はやまないから音声を出せば出ます。現に寝言をいう人もあるくらいです。

第三に、無限の変種をやす／＼と、作ることができます。身振りでもずいぶんいろ／＼なことができるにしても、万物を区別するのに、いろ／＼に身振りを変えて表わすとなるとたいへんなことです。が、音声の方ですと、わずか五十音で、これを一つ、三つ、四つずつ組み合わせると数万の語ができる、耳が専門にこれを受け取つて、たやすく聞き分けられます。

以上のような長所が音声にあるものですから、長い年代の間に、知らず知らず音声の方が、身振りをしのいで、長足の進歩をとげ、ついに身振りを補助の役に引きおろして、人類意志表示の最重要機関として、言語をかように発達させるにいたつたものと考えられるのであります。

七 言語と傳承

しかしながら、ひとりでにわかるという点では、音声は身振りに及ばなかつたものですから、そのわかりにくい音声をもととしてできあがつたわれ／＼の言語と、いうものに、取り返しのつかない宿命的な欠点が一つ附きまとつてしましました。それは何かというのに、言語は身振り語とは違つて、一教えられなければ使えないという欠点であります。身振り語の方ならば、ひとりでにわかるのですが、だから、だれでも別に教えられなくてもできるのです。おしは勝手にくふうしてやるのですが、それがまたよく相手にわかつて、初対面でも通じます。のみならず、外國人どうしでも平氣で、通弁なしに用が足ります。アメリカのおしの学校の先生が、ハワイのおしの子を連れて学校へ帰り、教場で、自分の教え子たちへ紹介しようと教壇でいろ／＼のことと言つてゐる間に、生徒たちの目が、そこに立つてゐるハワイからのおしの子の方へ吸いつけられているのに気がついて、見ると、來たばかりのハワイの子が、アメリカの子になれ／＼しく身振りで話をかわしていたのです。なんの話をしているのかと、紹介の辞をやめてじつと注意して見ると、今來た子が「ぼくは大きな船で大きな海を越えて來たぜ。その海は大きかつた。毎日毎日海ばかり、その次の日も、その次の日も……」などと話していくさいちゅうだつたので、初対面なのにもかゝわらず、紹介通弁なしに、結構わかるのかと、先生自身驚いてしまつて、「それではこゝへあがつて、みんなに話してござらん。」と教壇にあがらせて話をさせたことがあります。また、これもアメリカでの話に、スコットランド出のおしの婦人と、

フィンランド出のおしの少年とが、はしなくも公園の同じベンチに腰かけました。さすが同じ身の上、互にそれと気がつき出して、どつちからともなく身振りで話しかけて、夢中に話しあい、しばらくぶりで身振り語で話せる相手を見出だした喜びに、とつぶり日の暮れるまで話して名残りを惜しみながら、別れたということも傳えられています。

ですからスヴィートは、その「言語史」に「なまじつかな語学の知識を持つ人より、おしの方が、結構不自由なく世界一周旅行ができる。」と言つております。

もつとも言語の方にも、文典にいう間投詞（感詞・感動詞）などアーチー・オーラの類には世界共通のものもありますけれども、擬声語になるともう民族的になつて、にわとりはコケッコーとわれ／＼にはまねられますが、イギリスでは、カツクズツルズーと鳴くというふうに違ひ、太鼓がどん／＼鳴るといふのに、ラバダブーラバダブだといふ國もあり、ねこはにやあと鳴く（古代はネーと聞いたからネコ、即ち「ねこ」と思うのに、ミヤウ（中國）とか、ミウ（エジプト）とかいう國もあります。かつこう鳥のようにはつきりした鳴き声を持つものは、比較的共通にできていますが、赤ん坊の泣き声さえ、おぎやあおぎやあとする國語もあれば、アイ／＼とする國語（英語やアイヌ語）もあつて、なか／＼一致しにくいのであります。そのほかの語彙にいたつては、國々によつて千差万別、同國語内においてさえ方言によつて違うのであります。ですから、われ／＼は、生まれ落ちてから、周囲の人に一語一語を必ず習い覚えて行かなければなりません。いかなる天才も、生まれながらに言語を知つているものではなく、いかなる賢人の子も、どんな博言家の子も、生まれ落ちた時はおぎやあおぎやあ、だんだダダダ、ンマ／＼ンマ／＼、アブ／＼、ウンターから始めて、それから一つ／＼の國語をまねて覚えます。自分がやつたように子もやり、子がやつたように孫もやり、そうして一人まえになつて、やつと一人まえにものが言えるようになります。兄がやつたように弟も、その弟も、またその弟も、はじめからみなやりなおして、ひとりだつて除外例はありません。だれもかれも一様にそつやつて、いつさいのことばを受け継いでは後の代へ傳えていきます。言語の傳承とはこのことです。傳承によつて、言語が民族の間に存在し発達するのです。ですから、人間の言語といふものは、傳承によつて左右される存在で、決して自然的存在ではありません。鳥獸の鳴き声も廣い意味ではかれらの言語だと言えるのですが、言語だとすれば、あれはひとりでに覚えて鳴くので、いわば自然的言語であります。これに対しても人類の言語は傳承的言語（Traditional Language）であります。こゝにわれ／＼の言語が身振り語と異なり、また鳥獸の言語とも相違するゆえんがあるのであります。

（金田一京助の文による）

八 制作の方法

制作の方法を考えるにあたつて、諸君は、私が文学を情緒表現の藝術として定義するものであることを忘れてはならない。一体、情緒とはいかるものであるか。その價値、その性質はいかん。また、それはいかにしてとらえることができるか。

情緒といえば、諸君はおそらく、涙・悲哀・後悔の類を思い浮かべるであろう。しかし、これは私のいう情緒ではない。われ／＼はまずきわめて簡単な種類の情緒——一本の木に対する情緒について

考察することから始めよう。

諸君が一本の木をながめる時、諸君の内部には二つの事象が生起する。第一には、視覚を通して脳裏に投影された木の影像——即ちその木の小さい写真ができる。これがその木の與える感覺であるが、しかし、この影像はことばで描写しようとしても不可能であり、よしまでできたりしたところで、それはほとんど藝術的價値のないものであろう。しかし、これとほとんど同時に、諸君はこの第一の印象とは性質の異なる、第二の印象を受ける。諸君は、その木が諸君にある種の特異な感情を與えることに氣がつく。これは、その木に一定の性格があつて、それを諸君が知覺するからである。この性格の知覺がその木に対する感情もしくは情緒であつて、これこそ藝術家の求め、詩人の求めるところのものである。

すべて事物は、生物でも無生物でも、それを見る人の心に、ある感情を起させるものであつて、この意味において、すべての事物には「顔」があるともいわれよう。諸君が初対面の人に会つてその顔を見る時、まず受けるものは感覺的印象であるが、すぐそれに統いて一種の感情が起つて来る。即ち、その顔を好みか好まないか、あるいは比較的無関心でいられるかである。こういうことは、人間の顔に関しては何人も経験するところであるが、藝術家や詩人は事物に関してもこれを経験する。即ち、藝術家や詩人が他の人々と異なるところは、かれらはいわゆる事物の「顔」、即ちその性格を知覺する点にある。木でも山でも家でも、石でも、藝術家の目から見れば「顔」があり、性格がある。われわれも適當な方法によつて修練を続けて行く時は、かくのごとき事物の性格を認識しうるにいたるものである。

これで、私のいわゆる情緒、即ち作者のとらえ表わさんとする感情、あるいは情緒のいかなるものであるかは、ほど明らかになつたことと思う。われ々はこの上もなく簡単な標本、即ち一本の木に対する情緒について考察した。しかしながら、文学において取り扱われるいつさいの事物、いつさいの想像、いつさいの存在は、嚴密にこれと同じ方法で考えられなければならない。かくていかなる場合にも、作者の目的はその物の性格を把握し決定することであつて、かれはその物がかれの心に引き起した感情を如実に表現することによつてのみ、これを成就することができる。これが文学の主要な任務であるが、同時にまたきわめて困難な作業である。

感情の起る時はどんな現象が現われるか。諸君は、喜びか苦しみか恐れか驚きかの、瞬間的ななななななきを感ずる。しかしこのなななきは、突如として來たごとく、突如として去る。それが消え去ると同様に敏速に、それを書きとめることはできない。その時、諸君の心に残つているのは、その物の感覺即ち第一印象と、感情の單なる記憶とに過ぎない。人の性質の異なるにしたがつて感情の動き方にも相違があるから、ある性質の人々には感情が比較的長く残ることはあろう。が、いずれにせよそれは立ちのぼる煙のごとく、風に漂う香のごとく、はかなく消え去るものである。諸君がもし、この感情が起るやいなや、如実にそれを紙上に寫しうる人があると思つたら、それは大なる誤りであつて、これははげしい労作によつてはじめてなしとげられるものである。その労作とはいつたん受けた感情を再生させることである。

感情を再生させようとする時、はじめ諸君は、眠りから覚めて夢を思い出そうとする人と同じ状態にあるであろう。夢を思い出すことがいかにむづかしいかは、お互に知るごとくである。しかし、そ

の時受けた感覚的印象の助けによつて、感情が再生することがある。私がせつにすゝめたいのは、そういう際、直ちに筆をとつて、できるだけくわしくその感情のよつて來た事情および原因を書きとめ、できるだけくわしくその感情を写しておくことである。

そういう際には、文法的に正しくあろうとあるまいと、文章になつていようといまいと、あるいは順に書こうと逆に書こうと、問うところではない。要はその経験の覚え書を作るにある。この覚え書は、やがてそれから植物を育て花を開かせるべき種子である。

この速成の覚え書を読み返してみると、それによつて、あるいはその中のある部分によつて、かすかながらも感情が再生するのを感じことがある。しかし、もちろんそれは記録者にとつてのみのこととで、他人に対してもまだなんの價值もないものである。

**価値は
他より得る事無し**
次の仕事は、この覚え書を発展させ、それに自然の順序を與えて、正しい方法で文章を構成するることである。こんなことをしている間に、さきに覚え書を作った時には忘れていた数々の事実が心によみがえつて来る。かくして展開された成果は、もとの四、五倍から十倍にも達することがある。が、さてそれを読み返してみると、感情は再生するどころか、あとかたもなく消失して、いかにも平凡なものになつてゐる。三度めの稿においても、語句や思想はとゞのつて來るであろうが、やはり感情は再生していない。四度、五度と書きなおしてゐるうちに、驚くべき多くの変化が生じて來る。なんとなれば、われ／＼はこの労多き作業に從事している間に、必ず、すでに書いた事がらの多くは実は不要であり、最も必要な事がらはまだ少しも適當な展開を得ていないことに気がつくからである。かくして、はじめてわれ／＼に、われ／＼の真に書こうとしているものがなんであるかがはつきりと見えて來るのであつて、こゝにいたつて全体が形を変え、いつそう緊密に、いつそう力強く、いつそう單純になつて來る。そして最後に、喜ばしいことには、感情が再生して來る、——それどころではなく、新しい心理的関係を得て、最初経験した時よりも豊かにされ、いつそう有力に再生して來る。諸君は諸君の書いたものの美しさに驚嘆を禁じえないであろう。しかし、諸君はまだその時の感情を信じてしまつてはならない。それを即時印刷に附するかわりに、机の引き出しに入れて、少なくとも一箇月はそれをよくすることができるのを見ずにおくがよい。それだけ経過してから読み返してみると、きっと諸君は、なおいつそくそれは諸君の全力をこめた最上の作品になるであろう。そして、それは、諸君がその事実なりその物なりをはじめて知覚した時に、諸君みずからが感じたと同じ情緒を、他人に感じさせるであろう。

この過程は、望遠鏡の焦点を合わせる過程と非常によく似ている。遠方にある対象を最もはつきり見ようとするには、その筒を幾度も引き出したり引っこめたりしなくてはならない。文学者は、觀光者が望遠鏡をもつてするところを、言語をもつてしなくてはならない。これはいかなる種類の文学制作にあつても、第一に肝要なことである。勞苦は勞苦である。が、のがれる道は断じてない。長い間の修練もこの労力をいざゝかも輕減しはしない。その方法は非常に熟練して來るであろう。しかし、仕事の総量にはほとんど変わりがない。

思うに、諸君のうちには、数週間あるいは数日で一編を書きあげ、しかもそれが定期刊行物に発表されるや、幾千の読者を感動させ、多くの人に感激の涙を流させるのできるような作者もあるであらう。私はそれが公衆を喜ばせ、かれらの情緒を動かし、かれらの最もよい情操を鼓舞するであら

うこととも疑わない。そして、そうすることが文学の任務であると、かつては私も言つた。しかし、もし諸君にこの作品を私が文学と言うかと聞かれたら、私は「いな、それはジャーナリズムである。短時間に、したがつて不完全に書きなぐられたものであつて、文学の鉱石ではありえても、眞の意味の文学ではない。」と答える。諸君はあるいは言うであろう。「公衆はそれを文学と呼び、文学として扱つてくれる——それ以上に何を要求するのか。」と。

安價な文学は当座はかえつて割がよく、眞の文学は全く割に合わない。しかし、偉大な作家によつて書かれたすぐれた作品は、諸君がそれをくり返して読むたびごとに美しさを増して来る。そして、幾代にわたり幾世紀にわたつて、これを読む人々に對していよ／＼ます／＼その美を發揮して行く。しかるに安價な文学は、最初の一読にはこういう傑作よりもかえつておもしろいこともあるが、二度めには欠点が見えはじめ、三度、四度と読み返すにしたがつて、ます／＼それが目について来て、そのためには欠点が見えてくる。そこで、それが目に付いて来て、そこには嫌惡のあまりそれを投げ出すにいたるであろう。一般公衆は、長い間にこれと同様のことを行つてゐるのである。かれらはきょう愛読しているものを、あすは投げ捨てて顧みない。そしてそれが正当である。なぜならば、それは丹精をこらした作ではないのだから。

すべて一般的説明には多少の例外例のあることはまぬかれがたいが、だいたいにおいて、いずれの國語においても、古典と呼ばれるものは必ず完全な仕上げを示しているものであるといつても過言ではないと信ずる。

(小泉八雲原作—田部隆次の訳による)

九 長 歌

水江浦島子を詠める一首並びに短歌

万葉集

春の日のかすめる時に住吉の岸に出でるてつり船のとをらふ見ればいにしへの事ぞおもほゆる水江の浦島子がかつをつりたひつりほこり七日まで家にも來ずて海界を過ぎてこぎゆくにわたつみの神のをとめにたまさかにいこぎむかひあひとぶらひこと成りしかばかき結び常世にいたりわたつみの神の宮の内の重のたへなる殿にたづさはりふたり入りゐて老いもせず死にもせずして永き世にありけるものを世のなかのおろかびとのわきもこにのりて語らくしましくは家に帰りて父母に事ものらひあすのごとわれは來なむといひければ妹がいへらく常世べにまた帰り来て今のごとあはむとならばこのくしげ開くなゆめとそくらくにかためし言を住吉に帰り來たりて家見れど家も見かねて里見れど里も見かねてあやしとそこにおもはく家ゆ出でて三とせのほどにかきもなく家うせめやとこの箱を開きて見てばもとのごと家はあらむと玉くしげ少し開くに白雲の箱より出でて常世べにたなびきぬれば立ち走り叫びそで振りこいまろび足ずりしつゝたちまちにころ消失せぬ若かりしはだもしわみぬ黒かりし髪も白けぬゆな／＼はいきさ

へ絶えて のちつひに いのち死にける 水江の 浦島子が 家どころ見ゆ

反 歌

常世べに住むべきものをつるぎたちなが心からおそやこのきみ

月の兎をさぎ

良 寛

いそのかみ 古りにし御代に ありといふ 猿さるとをさぎと 狐きつねとが 友を結びて あしたには 野山ぬにあそび ゆふべにば 林にかへり かくしつゝ 年のへねれば 久方の天の帝あめのみことの 聞きまして それがまことを 知らむとて 翁おきなとなりて そがもとに よろばひ行きて 申すらく いましたぐひを ことにして 同じ心を 遊ぶてふ まこと聞きしが ごとならば 翁が飢ゑを すぐへと つゑを投げて いこひしに やすきこととて やゝありて ましはうしろの 林より 木の実拾ひて 来たりたり きつには前の 川原より 魚をくはへて あたへたり をさぎはあたりに とびとべど 何ものせで ありければ をさぎは心 異なりと のゝしりければ はかなしや をさぎはかりて 申すらく まじらはしばを 刈りて來よ きつにはこれを 燒きてたべ いふがごとくに なしければ 煙の中に 身を投げて 知らぬ翁に あたへけり 翁はこれを見るよりも 心もしぬに 久方の 天をあふぎて うち泣きて 土にたふれて やゝありて 胸うちたゞき 申すらく いまし三たりの 友だちは いづれ劣ると なけれども をさぎはことに やさしとて からを抱へて 久方の 月の宮にぞ はふりける

今の世までも 語りつぎ 月のをさぎと いふことは これがもとにて ありけると
聞くわれざへも 白たへの 衣のそでは とほりてぬれぬ

鉢はちの子

良 寛

はちの子は はしきものかも しきたへの 家出せしより あしたには かひなにかけて 夕べには 手上たなへにのせて あらたまの 年のを長く 持たりしを けふよそに忘れて來れば 立つらくの たづきも知らず をるらくの すべをも知らず かりこもの思ひみだれて ゆふづつの か行きかく行き 谷ぐくの さわたる底ひ あまぐも の むかふすきはみ 天地あめづちの よりあひの限り つゑつきも つかずも行きて 求めなむと 思ひし時に はちのこは こゝにありとて わがもとに 人は持て來ぬ いかなるや 人にませかも ちはやぶる 神ののりかも ねばたまの 夜の夢かも うれしくも 持て來るものか よろしなべ 持ち來るものか そのはちのこを

道のべのすみれつみつゝはちのこを忘れてぞ來しそのはちのこを
はちのこをわれ忘るれど取る人はなし取る人はなしはちのこあはれ

十 羽 衣

謡 曲

ワキツレ 漁夫白龍

ワキツレ 同行漁夫

シテ天女

ワキツレセイ 「風早の三保の浦わをこぐ舟の浦人さわぐ波路かな。

ワキサシ 「これは三保の松原に白龍と申す漁夫にて候。

ワキツレ謡 「万里の好山に雲たちまちに起り、一楼の明月に雨はじめて晴れたり。げにのどかなる時

しもや、春のけしき松原の波立ち続く朝がすみ、月ものこりの天の原、及びなき身のながめにも、心空なるけしきかな。

忘れめや、山路をわけて清見洞がた、はるかに三保の松原に、立ちついざや通はん。風向かふ雲の浮き波立つと見て、つりせで人や帰るらん。待てしばし、春ならば、吹くものどけき朝風

の、松は常磐ときはの声ぞかし。波は音なき朝なぎに、つり人多き小舟かな。

ワキ詞 「われ三保の松原にあがり、浦のけしきをながむるところに、虚空に花ふり、音樂聞え、靈香四方に薰す。これたゞごとと思はぬところに、これなる松に、美しき衣かれり。寄りて見れば、色香たへにして常の衣にあらず。いかさま取りて帰り、古き人にも見せ、家の宝となば

やと存じ候。

シテ詞 「なう、その衣はこなたのにて候。何しに召され候ぞ。

ワキ詞 「これは拾ひたる衣にて候ほどに、取りて帰り候よ。

シテ詞 「それは天人の羽衣とて、たやすく人間に與ふべきものにあらず。もとのごとくに置きたまへ。

ワキ詞 「そもそもこの衣の御主とは、さては天人にてましますかや。さもあらば、末世の奇特にとゞめあき、國の宝となすべきなし。衣を返すことあるまじ。

シテ詞 「悲しやな、羽衣なくては飛行のみちも絶え、天上に帰らんこともかなふまじ。さりとては返したびたまへ。

ワキ謡 「この御ことばを聞くよりも、いよ／＼白龍力を得、詞「もとよりこの身は心なき、天の羽衣取り隠し、謡「かなふまじとて立ちのけば、

シテ謡 「今はさながら天人も、羽なき鳥のごとくにて、あがらんとすれば衣なし。

ワキ謡 「地にまた住めば下界なり。

シテ謡 「とやあらん、かくやあらんと悲しめど、

ワキ謡 「白龍衣を返さねば、

シテ謡 「力及ばず、

ワキ謡 「せんかたも、

地謡 「涙の露の玉かづら、かざしの花もしを／＼と、天人の五袴も、目の前に見えてあさましや。

シテ謡 「大の原、ふりさけ見れば、かすみ立つ、雲路まどひて行くへしらざも。

地謡 「住みなれし、空にいつしか行く雲の、うらやましきけしきかな。迦陵頻伽かりようびんのなれ／＼し、声いまさらにわづかなる、かりがねの帰り行く、天路を聞けばなつかじや。ちどり・かもめの沖

つ波、行くか帰るか春風の、空に吹くまでなつかしや。

ワキ詞 「いかに申し候。御姿を見たてまつれば、あまりに御いたはしく候ほどに、衣を返し申さうず

るにて候。

シテ詞 「あらうれしや。こなたへ賜はり候へ。

ワキ詞 「しばらく。承りおよびたる天人の舞樂、たゞ今こゝにて奏したまはば、衣を返し申すべし。

シテ詞 「うれしや。さては天上に帰らんことを得たり。この喜びに、とてもさらば、人間の御遊のかたみの舞、月宮をめぐらす舞曲あり。たゞ今こゝにて奏しつゝ、世のうき人に傳ふべし。さりながら、衣なくてはかなふまじ。さりとてはまづ返したまへ。

ワキ詞 「いや、この衣を返しなば、舞曲をなさでそのまゝに、天にやあがりたまふべき。

シテ詞 「いや、疑ひは人間にあり。天に偽りなきものを。

ワキ詞 「あらはづかしや。さらばとて、羽衣を返し與ふれば、

シテ詞 「をとめは衣を着しつゝ、霓裳羽衣の曲をなし、

ワキ詞 「天の羽衣風に和し、

シテ詞 「雨にうるほふ花のそで、

ワキ詞 「一曲をかなで、

シテ詞 「舞ふとかや。

地謡 次第 「東遊」の駿河舞、この時やはじめなるらん。

クリ 「それ久かたのあめといつば、二神出世のいにしへ、十方世界を定めしに、空は限りもなけれども、久かたの空とは名づけたり。

シテ サシ 「然るに月宮殿のありさま、玉斧の修理とこしなへにして、

地謡 「白衣、黒衣の天人の、數を三五にわかつて、一月夜々の天をとめ、奉仕を定め役をなす。

シテ詞 「われも数ある天をとめ、

地謡 「月のかつらの身をわけて、かりに東の駿河舞、世に傳へたる曲とかや。

クセ 「春がすみたなびきにけり、久かたの、月のかつらも花や咲く。げに花かづら色めくは、春の

しるしかや。おもしろや、天ならでこゝもたへなり天つ風、雲の通ひ路吹きとぢよ。をとめの姿しばしとどまりて、この松原の春の色を三保が崎、月清見潟、富士の雪、いづれや春のあけぼの。たぐひ波も、松風も、のどかかる浦のありさま。その上天地は、何を隔てん玉垣の、内外の神の御末みすゑにて、月も曇らぬ日の本や。

シテ詞 「君が代は、天の羽衣まれに來て、

地謡 「なづとも盡きぬいはほどと、聞くもたへなり東歌。声そへてかづくの笙・笛・琴・箜篌、

孤雲のほかに充ち満ちて、落日の紅は、蘇命路の山をうつして、綠は波に浮島がはらふあらしに花ふりて、げに雪をめぐらす白雲のそでぞたへなる。

シテ詞 「南無帰命月天子、本地六勢至。

地謡 「東遊の舞の曲、

シテワカ 「あるひは天の御空の緑のだ、

地謡 「または春立つかすみの衣、

シテ詞 「色香もたへなり、をとめの裳裾、

地謡 「左右左、さいう颯々の、花をかざしの天の羽そで、なびくも返すも舞のそで。

キリ「東遊の数々に、その名も月の宮人は、三五夜中の空にまた、満月真如の影となり、御願田満、國土成就、七宝充満の宝をふらし、國土にこれを施したまふ。さるほどに時移つて、天の羽衣浦風に、たなびきたなびく三保の松原、浮島が雲の、愛鷹山や富士の高ね、かすかになりて、天つ御空のかすみにまざれて失せにけり。

國語學習の手引

中等國語三(1)に載せてある教材は、次に掲げた作者の作品によつたものである。こゝに記さない教材は、古典ならびに文部省作である。

課名

新聞の話
キューリー夫人

原作者
鈴木文史朗
エーヴリキュー
リー

訳者
原典
川口篤
河盛好藏
杉捷夫

課名

キューリー夫人傳
キューリー夫人

題目

花より雨に
山のあなた

原作者
永井荷風
本田喜代治

訳者
荷風全集

題目

春の朝
落葉

原作者
ブラウニング
ヴェルレーヌ

訳者
上田敏

山のあなた

原作者
スワイフト

訳者
海潮音
ガリバーの航海

題目

小人國

原作者
上田敏

訳者
海潮音
ガリバーの航海

題目

身振り語と言語

原作者
制作の方法

國語学習の手引

次に掲げたものは、各課の教材を学習するに当たり、どんなことをしたらいいかを、幾つか拾いあげて書き示したものである。

各科の文章を読むための準備もあり、その心構えもある。またその方法となるようなもの、理解を助ける問題、理解をためす質問、更に理解を発表する話し合いもある。

なお、表現力を伸ばすための仕事も織りこまれており、研究調査のしかたを示してある。しかしこれらは、みな必ず完成しなければならないものではなく、適当に取捨選択をしたり、あるいは補充したりして、興味のある正しい学習を進展させて行ってほしい。

一 天の香具山

- (1) どんな材料をどんなふうに詠んでいるか。すでに学んだ万葉集や古今集の歌と比べてみる。
- (2) 「歌ごころ」(中等國語二(1)(三))を読み返し、現代短歌と比べてみる。
- (3) どこで切れているかを調べて、万葉集の歌の調子との違いを考える。
- (4) 好きな歌について、みんなで話し合う。
- (5) 新古今和歌集について調べる。
- (6) 俊成・西行・定家のほかの歌を調べる。

二 新聞の話

- (1) 新聞の起原と発達について作者はどういっているか。
- (2) ニュースを集めて編集する標準は何か。
- (3) 新聞社の組織はどうなっているか。
- (4) できれば、新聞社を見学して実地に調べたことを話し合ったり、記録したりする。
- (5) 新聞を持ち寄り、いろいろな観點からそのよしあしを話し合う。
- (6) 学校新聞や学級新聞の改善について話し合う。

三 キーリー夫人

- (1) この文の編集について調べる。
 - イ、編集者
 - ロ、材料(手紙・新聞記事・辞令・日記など)
 - ハ、全体の構成
- (2) マリーの日記について話し合う。
- (3) 全体を一続きの傳記に書きなおす。できれば脚色してみる。
- (4) このようにいろいろな材料を集めて、ほかの人のことを書いてみる。
- (5) 新聞記事に取材して何か書いてみる。

四 花より雨に

- (1) 四つの文についてその風景と作者の感じとを考えてみる。
- (2) 四つの文がどんな関係になつてているか。
- (3) むずかしい語句を調べる。
- (4) 巧みな表現を書き出してみる。
- (5) 現代作家の中で名文家といわれる人たちの隨筆を読む。

五 山のあなた

- (1) 「春の朝」「落葉」の読後感を話し合う。
- (2) 次の間に答える。
 - イ、「秋の日のヴィオロンのためいき」とはどういうことか。
 - ロ、「山のあなたの空遠く」と「山のあなたになほ遠く」との違い。
 - ハ、「ひと」と「人」は同じか、違うならばどう違うか。
 - ニ、「幸」ということ。
- (3) 三つの詩の形、更に一般に詩の形について調べる。
- (4) 朗読をくふうする。

六 小人國

- (1) 話の筋をノートに書き、みんなの前で話す。
- (2) どこがおもしろいかをみんなで話し合う。
- (3) ガリバーの旅（小人國・大人國）を読んで感想を話し合つたり、書き記したりする。
- (4) この話のような構想で何かおもしろい物語を作る。
- (5) もつと外國の物語や小説を読む。

七 身振り語と言語

- (1) 次のことに関する作者の見解を調べる。
 - イ、身振り語の種類
 - ロ、身振り語と音声語との比較
 - ハ、人間の言語の特徴
- (2) 言語について他の書物で調べる。
- (3) 話したことばと書きことばと比べ、その長所と短所を考える。
- (4) 言語についてのいろいろな問題を話し合う。
- (5) 言語についての自分の考えをまとめて作文を書く。

八 制作の方法

- (1) 自分たちの制作の体験を話し合う。
- (2) 次のことに関する作者の見解を調べる。
文学、情緒、作家の目的、制作の方法、ジャーナリズムと文学、古典。
- (3) 真の文学とは何かについてもつと考へる。
- (4) 古典の本質について調べてみる。
- (5) 小泉八雲の書いたほかの作品を読んでみる。

九 長 歌

- (1) 「浦島子」の話の筋を書いてみる。自分の知っていた話と比べてみる。
- (2) 作者の浦島觀について考へる。
- (3) 「月の兎」の筋をみんなで話し合う。
- (4) むずかしい語句を辞書で調べて、「鉢の子」を口語になおしてみる。
- (5) まくらことばと対句などを抜き出してみる。
- (6) 三つの歌の調子を調べて、比べてみる。
- (7) 朗誦をくふうする。
- (8) 良寛について調べる。

十 羽 衣

- (1) できれば、能を見たり、謡を聞いたりして、その実際を知る。
- (2) 序・破・急ということを調べてみる。
- (3) 登場人物と構成を調べる。
- (4) この文章を現代語のせりふに書きなおして、原文と比べてみる。
- (5) 能や謡曲についてもつと調べる。

中等國語
三
(1)

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE Oct. 21, 1948)

發行所	印 刷 者	中 等 學 校 教 科 書 株 式 會 社	文 部 省
	行 者 剔	東京都千代田区神田岩本町三番地	同 日 製 刻 發 行
	東京都千代田区神田神保町一ノ四六番地	代 表 者 阿 部 真 之 助	同 日 製 刻 發 行
	新 藤 加 代表者	文化印 刷 株 式 會 社	同 日 製 刻 發 行
	東京都千代田区神田岩本町三番地	中 等 學 校 教 科 書 株 式 會 社	同 日 製 刻 發 行

昭和二十二年三月十四日印 刷
昭和二十二年三月十八日發 行
昭和二十三年二月三日修正印 刷
昭和二十三年二月七日修正發行

〔昭和二十三年二月七日 文部省検査済〕



広島大学図書

0130449845

